

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	北周における庾信
Author(s)	森野, 繁夫
Citation	中國中世文學研究 , 56 : 1 - 21
Issue Date	2009-09-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051413
Right	
Relation	



北周における庾信

庾信については既に「梁末における庾信」(『中国中世文学研究』48)、「西魏における庾信」(『中国中世文学研究』50)で、梁末の侯景の反乱による建康陥落、西魏の侵攻による江陵陥落の際の庾信の行動を見てきたが、この度は其の後の、北周における後半生について取りあげる。元帝の使者として西魏(長安)に赴いたのが承聖三年(五五四)四二歳。それから隋初(五八一)に六九歳で亡くなるまでの二十七年間は庾信にとってどのような歳月であったのか。

庾信が西魏に拘留されたあと暫くして、江陵陥落によって梁の尚書令王褒らが長安に送られてきた。庾信と王褒は同年の生まれであり、その二十年餘りを俱に北周で過ごしている。この度は王褒との比較を通して庾信の後半生を見ていくことにする。

庾信は梁の國使として西魏(長安)に滞在していた時、西魏軍の侵攻によって江陵が陥落したため、そのまま拘留されたのであるが、王褒は江陵陥落後に王克、宗懐、殷不害らとともに北地に連行されてきた。そのときの様子は『周書』王褒傳に次のように記されている。

森野繁夫

褒は王克、劉毅、宗懐、殷不害ら數十人と俱に長安に至る。太祖(宇文泰)は喜びて曰く「昔、呉を平らぐるの利は、二陸なるのみ。今、楚を定むるの功は、羣賢畢く至る。之に過ぎたりと謂ふべし」と。又た褒及び王克に謂ひて曰く「吾は即ち王氏の甥なれば、卿らは並びに吾の舅氏なり。當に親戚を以て情と爲すべし。郷を去るを以て意に介すること勿れ」と。是に於て褒及び王克、殷不害らに車騎大將軍・儀同三司を授く。常に上席に從容して、資餼は甚だ厚し。褒らも亦た並びに恩眄を荷ひ、其の羈旅を忘る。

褒與王克、劉毅、宗懐、殷不害等數十人、俱至長安。太祖喜曰「昔平吳之利、二陸而已。今定楚之功、羣賢畢至。可謂過之矣。」又謂褒及王克曰「吾即王氏甥也。卿等並吾之舅氏。當以親戚爲情、勿以去郷介意。」

於是授褒及克、殷不害等車騎大將軍、儀同三司。常從容上席、資餼甚厚。褒等亦並荷恩眄、忘其羈旅焉。

西魏の相(後、北周の太祖)宇文泰は、先進國である南朝の文化を吸収して國家の基盤を固めようとしており、そのためには梁朝の知識人たちの力が必要であった。

王褒らは宇文泰に言われるままに西魏に出仕しているが、しかし庾信は宇文泰の出仕要請を受け容れようとはしなかった。そのため「三年囚於別館」(「哀江南賦」序)ということになった。

その間の事情については既に「西魏における庾信」で述べたが、その主な理由は、侯景の亂で梁の首都建康が陥落した際、また西魏軍の侵攻によって江陵が蹂躪された際の自分の勝手な行動によって、梁の民が塗炭の苦しみを受ける結果になった責任を感じてのことであった。それは庾信一人の責任ではなかったが、彼の慚愧の思いは深かった。

庾信は「三年囚於別館」の後に仕仕するが、その時期は宇文泰が没した、西魏最後の帝である恭帝の大定三年(五五六)十月前後ではなかったか。宇文泰は庾信が其の氣になるまで氣長に出仕を待ってくれていたが、庾信は泰がいなくなると事情は変わってくることを心配したに違いない。それにまた江陵陥落後、老母と妻、幼児が長安に連れて來られていたことも、これ以上は仕仕拒否を続けられない要因であったろう。仕仕した庾信は使持節撫軍將軍・右金紫光祿大夫・大都督に拜せられ、やがて車騎大將軍・儀同三司に遷っている。

一 北周における庾信と王褒

西魏に出仕してからの庾信について、『北周書』本傳に

よれば、

世宗、高祖は、並びに雅り文學を好み、信は特に恩禮を蒙る。趙、滕の諸王に至りては、周旋款至、布衣の交りの若き有り。群公の碑誌、多く相請託さる。唯だ王褒のみ頗や信と相埒しく、自餘の文人は、逮ぶ者有る莫し。

世宗、高祖並雅好文學、信特蒙恩禮。至於趙、滕諸王、周旋款至、有若布衣之交。羣公碑誌、多相請託。唯王褒頗與信相埒、自餘文人、莫有逮者。(『北周書』庾信傳)

とあり、庾信はその「文學」によって、帝や諸王の親待を受けている。

一方、王褒については、同じく『北周書』本傳に、孝閔帝踐阼し、石泉縣子、邑三百戸に封ぜらる。世宗即位するや、篤く文學を好む。時に褒は庾信と、才名最も高く、特に親待を加へらる。帝は遊宴する毎に、褒らに命じて詩を賦し談論せしめ、常に左右に在り。尋で開府儀同三司を加へられ、保定中、内史中大夫に除せらる。高祖の『象經』を作るや、褒をして之に注せしむ。引據該洽なれば、甚だ稱賞せらる。

孝閔帝踐阼、封石泉縣子、邑三百戸。世宗即位、篤好文學。時褒與庾信、才名最高、特加親待。帝每遊宴、命褒等賦詩談論、常在左右。尋加開府儀同三司、保定中、除内史中大夫。高祖作象經、令褒注之。引據該洽、甚見稱賞。(『北周書』本傳)

①孝閔帝(宇文覺)五五七 ②明帝世宗(宇文毓)五五七
七五六〇 ③武帝高祖(宇文邕)五六〇—五七八

とあり、帝の親待を受けている。兩者の違いとして庾信は「帝、諸王」に親待されているが、王褒は「帝」とあるだけで「諸王」が記されていない点がある。諸王との関わりは庾信の場合ほど親密でなかったたのであろう。

文学の面ではこのように「親待」された兩者であつたが、官職については異なつていた。先ず庾信についてみるに、孝閔帝が即位した永定元年(五五七、四五歳)に、臨清縣子邑五百戸に封ぜられ、司水下大夫に除せられてゐる。「司水」とは、船舶や橋梁を司る役所。

そのご、弘農郡守として地方に出て、やがて中央に歸つて司憲中大夫となり、爵を義城縣侯に進められた。「司憲」は司法府のことであり、滕王道の「庾信集序」によれば、「入りて司憲中大夫と爲る。秋府の人を得るや、斯に於て盛んなりと爲す。嘗て詩(「正旦上司憲府」)を賦して曰く『詰且啓門闌、繁辭擁筆端』云云。其の王事の中に優游すること此の如し」とある。

明帝の武成二年(五六〇、四八歳)には王褒、庾季才らと麟趾殿學士となつて書を校している。「麟趾殿」は、秘書監の名。北齊には文林館學士が有り、北周には麟趾殿學士が有つて、いずれも著述を掌つた。

庾信の、司水下大夫、司憲中大夫、麟趾殿學士であつた時期の作品があるので、その頃の庾信の様子を見てみよう。先ず司水下大夫であつた時、渭橋の工事を視察し

たおりの作「忝在司水看治渭橋」詩について。

・司水の職を忝くし渭橋の工事を視察する

大夫として下位に參與し、渭水の北で仕事に當たる。富平から鐵鎖を移し、甘泉から石梁を運ぶ。「虹の橋は絶岸を跨ぎ、浮龜により斷航は接續された。春の中洲は鸚鵡色、流れる水は桃花の香り。」星の精は漢帝に逢い、釣翁は周の文王に出會つた。平らな堤、石の護岸が伸び、高い堰に柳が枝を垂れる。」あの杜元凱が、河橋を架けて獨り盃を擧げたのを羨む。

大夫參下位、司職渭之陽。富平移鐵鎖、甘泉運石梁。

跨虹連絶岸、浮龜續斷航。春洲鸚鵡色、流水桃花香。

星精逢漢帝、釣叟值周王。平隄石岸直、高堰柳陰長。

羨言杜元凱、河橋獨舉觴。

「浮龜續斷航」「浮龜」は、多くの龜を浮かべて其の上に板を敷いて作つた浮き橋。周の穆王が越を伐つたとき、九江に至り、龜を架けて梁としたという。「斷航」は、途切れた舟橋。「星精逢漢帝」「漢帝」は武帝を指す。武帝は渭橋の辺で女人星に會つたという。「釣叟值周王」「釣叟」は呂尚を、「周王」は周の文王を指す。文王は呂尚に渭水の陽で遇つた。「羨言杜元凱、河橋獨舉觴」「杜元凱」は、名は預、晋の人。「晋書」杜預傳に「杜預は孟津の渡の險にして、覆没の患ひ有るを以て、河橋を富平津に建てんことを請ふ。議する者以爲へらく、殷・周の都する所にして、聖賢を歴るも作らざるは、必ず立つ可からざるが故ならんと。預曰く、『舟を造りて梁と爲す』(『毛詩』大雅・大明)とは、

則ち河橋の謂なりと。橋の成るに及び、帝は百僚を従へて會に臨み、觴を擧げて預に屬して曰く、君に非ざれば、此の橋は立たざるなり」とある。

次に司憲中大夫の時の作に「正旦上司憲府」（早旦司憲の府に上る）があり、司憲府での勤務の様子が詠われている。

・早朝 司憲の役所に上る

朝早くに門闌を開けば、繁き辭は筆端から湧いてくる。蒼鷹は獄吏に罪人を下し、獬豸は法官の冠を飾る。朝廷を司つて玉節を引き、會盟の時には珠盤を捧げる。十二月になつて星は宿りを移したがまだ餘日があり冬はまだ弾きてはいない。雪は三尺の高さに積もり、氷は一丈の厚さに凍っている。短い筍は猶お竹の根元に埋まり、香わしい蘭の芽はまだ出ていない。孟門で久しく路に迷っていたが、扶搖の風に乗つて忽ち空に羽ばたくことができた。御史府に棲みついていた鳥は還た府に歸つて來、棄てられた馬も復た厩に歸ることができた。しかなしながら榮華の身は名目のみ重く、虚薄なる才能ゆえ恩に報いることは難しい。枚乗のようになおも病の床から身を起こし、貢禹のように冠の塵を拂つて仕官を願つていたのだが。いまや蓮葉の劍を腰に垂れており、竹根の丹葉はまだ用いてはいない。ひたすら象法を懸けることに勤めており、「釣竿を垂れる」ことなど誰が思おうか。

詰旦啓門闌、繁辭湧筆端。蒼鷹下獄吏、獬豸飾刑官。司朝引玉節、盟載捧珠盤。窮紀星移次、歸餘律未彈。雪高三尺厚、水深一丈寒。短筍猶埋竹、香心未啓蘭。孟門久失路、扶搖忽上搏。棲鳥還得府、棄馬復歸欄。榮華名義重、虚薄報恩難。枚乘還起疾、貢禹遂彈冠。方垂蓮葉劍、未用竹根丹。一知懸象法、誰思垂釣竿。

〔蒼鷹〕蔽正な法官のこと。〔獬豸〕法官をいう。獬豸はその冠。〔玉節〕玉で作った符節。それを手に會議を司る。司憲大夫の職務。〔孟門久失路、扶搖忽上搏。棲鳥還得府、棄馬復歸欄〕弘農郡守であつた時期のことと、司憲中大夫として復歸したことをいうのであろう。〔竹根丹〕不老長生の仙薬。〔象法〕法律を世人に知らせること。〔垂釣竿〕官を退いて隱棲すること。

麟趾殿學士であつた時の作「預麟趾殿校書和劉儀同」は次のような内容である。

・麟趾殿での校書に預る 劉儀同に和す

戈を止めて禮樂を興し、文徳を修め「典謨」を盛んに學ばれる。壁の中からは金や石に刻まれた書籍が現れ、河には雲霧がかかつて河圖書が浮きあがる。芸香は延閣に献上され、碑石は鴻都門に運ばれる。『尚書』を誦して博士として徴され、經書に明るいは者は大夫とされる。壁塵を取り巻く池には寒い水が落ちており、學市には槐樹の舊木もまばらになつてはいるけれど。高談は「白馬非馬」の論を變えさせ、雄辯は「飛狐口」を閉鎖させるほ

どのもの。」月は將軍樹に落ち、風は御史府の烏を驚かせている。子雲は猶お竹を焙あひつて竹簡を作っており、温舒は今も蒲を削きつて牒はにしている。」雲に届くばかりに高閑は聳おこえているけれど、やがてはもといた江湖にと想われることだ。

止戈興禮樂、修文盛典謨。壁開金石篆、河浮雲霧圖。
芸香上延閣、碑石向鴻都。誦書徵博士、明經拜大夫。
璧池寒水落、學市舊槐疎。高譚變白馬、雄辯塞飛狐。
月落將軍樹、風驚御史烏。子雲猶汗簡、温舒正削蒲。
連雲雖有閣、終欲想江湖。

「典謨」「尚書」の堯典・舜典・大禹謨・皋陶謨・益稷をい
う。古の聖賢訓戒の辭。「壁開金石篆」魯の共王が孔子の舊
宅を壊したところ、その壁の中から經書が出てきたが、そ
れと同じようなことが起きたというのである。「金石篆」
は、金や石に刻まれた古文。「芸香」香草のことで、書物に
つく蠹むしを防ぐ。「高譚變白馬」「高譚」は、戰國・公孫龍の
「白馬非馬」の論を論破するほどのものである。「雄辯塞飛
狐」「雄辯」は、漢の酈れい食其が沛公劉邦に獻策した「飛狐
の口を距て、白馬の津を守つて項羽を破る謀」(『史記』酈
食其傳)をも「塞ぐ」ほどである。「子雲猶汗簡」「子雲」
は、漢の楊雄の字。『方言』の著者。「汗簡」は、竹簡にす
るために、竹を火で焙あひつて油を抜くこと。まだ其の文才を
認められていない頃の楊雄の様子を描いて、この夜更けに
もなお學問の精進を續ける人達がいることを言うのである
う。「温舒正削蒲」『漢書』路温舒傳に「字は長君、父は里

の監門爲り。温舒をして羊を牧せしむ。温舒は澤中の蒲を
取り、載かりて以て牒はと爲し、編あみて用て書を寫す。後に『春
秋』を受けて大義に通じ、孝廉に擧げらる。
庾信は司水大夫、司憲中大夫、麟趾殿學士それぞれの
職務に、真面目に取り組んでいるようだ。

ついで地方に出て洛州刺史を拜し、簡静なる政治を行
つて民に慕われ、やがて徴されて司宗中大夫と爲つてい
る。「司宗」は禮府であり、滕王道の「庾信集序」には、
「禮府を総轄し、春卿を佐治す。九拜の儀を辨じ、六詩
の義を教ふ」とある。

王褒の場合は、孝閔帝が踐阼すると石泉縣子 邑三百戸
に封ぜられ、武帝の保定(五六一〜五六五)中に内史中
大夫に除せられた。東宮が建てられると太子少保を授け
られ、やがて小司空に遷り、乘輿の行幸には、常に侍從
した。尋たづねで地方に出て宜州刺史と爲つてゐる。

二人の官歴を見るに、行政府での実務に携たわることが
多かった庾信に比べて、王褒の場合は朝廷の中枢に関わ
る官職に就くことが多かった。

王褒は江南の「名家」出身であり、その文才と謙虚な
人柄にがで時の評価は高かった。そうして其の評価は北地に
おいても変わることはなかった。すなわち、

褒に器局有り、雅よより治體を識る。既に累世 江東に在
りて宰輔た爲れば、高祖も亦た此を以て之を重んず。建
徳以後、頗る朝議に參じ、凡そ大詔冊は、皆な褒をし

て具草せしむ。東宮既に建ちて、太子少保を授けられ、小司空に遷るも、仍ほ綸誥を掌る。乘輿行幸すれば、褻は常に侍従す。〔北周書〕本傳

褻有器局、雅識治體。既累世在江東爲宰輔、高祖亦以此重之。建德以後、頗參朝議、凡大詔冊、皆令褻具草。東宮既建、授太子少保、遷小司空、仍掌綸誥。

乘輿行幸、褻常侍從。

王褻は代々の帝に信任され、その従順な人柄と、文章の才能、江南で世々宰輔の家柄であったことによる「治體」政治感覚・知識などを認められて、帝の側近くに仕えている。また北地から、江南の親友周公讓へ送った書簡の内容からも知られるように、北遷の境遇を恨み嘆く語句はあまり見られず、それを仕方のないこととして受け入れていたようだ。

このような王褻とは異なつて庾信は、「三年」の仕官拒否、更に「小園」での隱棲によつて、亡国の恨みを懷きながら心ならずも北周に仕えている要注意人物と見なされていたのではなからうか。

庾信と王褻への北人の対応の異なりは、両者の作品内容の違いからも明らかである。王褻は、江南において代々宰輔の家柄であったということで高祖武帝に重んじられ、建德（五七二〜五七七）以後は朝議に参加し、その間の主要な詔勅は皆褻の具草であつたようだ。

王褻の関わつたであろう詔勅としては、次のようなも

のが残されている。

〔建德元年〕

〔誅晉公護大赦改元詔〕〔省徵發詔〕〔追尊孝閔帝詔〕

〔大旱詔〕〔還長孫儉賜宅詔〕〔追贈李遠詔〕

〔建德二年〕

〔答太子詔〕〔婚嫁禮制詔〕〔頒老職詔〕

〔建德三年〕

〔嫁娶以時詔〕〔糶積貯詔〕〔大赦詔〕〔文宣皇后喪詔〕

〔立通道觀詔〕

〔建德四年〕

〔勸農詔〕〔伐齊詔〕

しかし庾信には詔勅具草の役割は與えられず、齊、趙、滕の諸王の爲の代作、また諸侯からの依頼による「碑誌」などが多い。例えば諸侯に依頼された「碑誌」としては以下のような作が残されている。

〔周上柱國齊王憲神道碑〕

〔周太子太保步陸逞神道碑〕

〔周大將軍崔說神道碑〕

〔周柱國大將軍紇千弘神道碑〕

〔周柱國大將軍拓跋儉神道碑〕

〔周大將軍司馬裔碑〕

〔周柱國大將軍大都督同州刺史爾綿永神道碑〕

〔周車騎大將軍賀婁公神道碑〕

〔周上柱國宿國公河州都督普屯威神道碑〕

〔周柱國楚國公岐州刺史慕容公神道碑〕

〔周兖州刺史廣繞公宇文公神道碑〕

〔周隴右總管長史贈少保豆盧公神道碑〕

〔周大將軍襄城公鄭偉墓誌銘〕

〔周驃騎馬大將軍開府侯莫陳道生墓誌銘〕

〔周車騎大將軍贈小司空宇文顛墓誌銘〕

〔周大將軍琅邪壯公司馬裔墓誌銘〕

〔周大將軍懷德公吳明徹墓誌銘〕

〔周大將軍上開府廣繞公鄭常墓誌銘〕

〔周大將軍開嘉公柳遐墓誌銘〕

〔故周大將軍義興公蕭公墓誌銘〕

〔周故大將軍趙公墓誌銘〕

〔周譙國公夫人步陸孤氏墓誌銘〕

〔周趙國公夫人紇豆陵氏墓誌銘〕

〔周安昌公夫人鄭氏墓誌銘〕

〔周大將軍隴東郡公侯莫陳君夫人竇氏墓誌銘〕

〔周冠軍公夫人烏石蘭氏墓誌銘〕

〔周太傅鄭國公夫人鄭氏墓誌銘〕

〔後魏驃騎將軍荊州刺史賀拔夫人元氏墓誌銘〕

〔周大都督陽林伯長孫瑕夫人羅氏墓誌銘〕

〔周驃騎將軍開府儀同三司冠軍伯柴烈李夫人墓誌銘〕

庾信と王褒はいずれも「文学」によって歴代の帝や諸王に重んじられていたが、そこには自ずから担当に違いがあったようだ。その違いは、庾信、王褒の家柄、得意の分野によるものであろうが、その他に北周に對する二人

の意識の違い、そのことに對する北周要人の考えも影響していたのではなからうか。

庾信には、梁末における自分の不甲斐ない行動に對する「慚愧の思い」と、祖国の梁を滅ぼした西魏（実は北周）への「恨み」、が消えることなく残っており、北朝出生後も其の思いを詩に詠じ続けている。

例えばその「擬詠懷詩」二十七首には、庾信の「西魏への使者としての志が果たされなかつた無念さ」「祖国を滅ぼされた恨みを晴らせないでいる歎き」「祖国を滅ぼした國に仕える恥辱」などが、繰り返し詠われている。

* 誰知志不就 誰か知らん志の就らず

空有直如弦 空しく直きこと弦の如き有るのみ

洛陽蘇季子 洛陽の蘇季子

連衡遂不連 連衡遂に連ならず（その二）

「志が果たされないと誰が考えたであろうか、今は虚しく道の邊に野垂れ死。洛陽の蘇季子、「連衡」の策は遂に成らなかつた。」——元帝の使者として西魏に遣わされながら、何の働きもできなかったことを恥じている。

* 燕客思遼水 燕客 遼水を思ひ

秦人望隴頭 秦人 隴頭に望む

倡家遭強聘 倡家は強聘に遭ひ、

質子值仍留 質子は仍留に値ふ。

自憐才智盡 自ら才智の盡きたるを憐れみ、

空傷年鬢秋 空しく年鬢の秋を傷む（その三）

「燕客は秦に在つて遼水を懐かしみ、秦人は隴山の上で故郷を望んでいる。倡家の女は無理に妾にされ、質子はおも留められている。才智も盡き果てた己を自ら憐れみ、年老いた身を空しく傷むばかり。」—梁の高官としての任務を果たせず、多くの民を異国の奴隸としてしまった己の無能を嘆く。

* 壯情已消歇 壯情 已に消え歇き、

雄圖不復申 雄圖 復びは申びず。

移住華陰下 移されて華陰の下に住み、

終爲関外人 終に関外の人と爲る。(その五)

「壯情は已に消え盡きてしまい、雄圖ももはや伸ばすことはできない。長安の下に移り住んで、終に関外の人となつてしまった。」—かつての「壯情」「雄圖」も盡き果てて、関外の人となりはてた情けなさを詠う。

* 恨心終不歇 恨みの心は終に歇きず

紅顔無復多 紅顔 復た多きこと無し

枯木期填海 枯木もて海を填めんと期し

青山望斷河 青山もて河を斷たんと望む(その七)

「恨みの心は何時まで盡きることなく、紅顔ももはや長くはもたない。枯れ木を運んで海を填めんと心に期し、青山で黄河の流れを斷ちたいと望むけれど」—亡国の恨みを晴らすことのできぬまま、年を重ねてしまった無念さ。

* 智士今安用 智士今 安にか用ひられん

忠臣且未聞 忠臣すら且つ未だ聞かず

惜無萬金産 惜しむらくは萬金の産の

東求滄海君 東して滄海君に求むる無きを(その十二)

「智士も今や用いられる場所もなく、忠臣の存在も聞きたことはない。残念なのは私に東方に出かけて力士を滄海君に求める萬金の産の無いこと。」—亡国の恨みを晴らす力の無い自分を嘆いている。

* 楚師正圍鞏 楚師 正に鞏に圍まれ、

秦兵未下嶠 秦兵 未だ嶠に下らず。

始知千載内 始めて知る 千載の内、

無復有申包 復た申包の有る無きを。(その十五)

「時に楚の軍は「鞏」に圍まれたが、「秦兵」はまだ「嶠」に下つてきていなかったのに。この千年の間に、申包胥はもはや現れることは無かつたのだ。」—楚の申包胥のように身を棄てて祖国の危機を救うことができなかつたことを残念に思っている。

* 在死猶可忍 死に在りてすら猶ほ忍ぶ可し

爲辱豈不寬 辱め爲ること 豈に寬さざらんや

古人持此性 古人 此の性を持するも

遂有不能安 遂に安んずる能はざる有り

其面雖可熱 其の面 熱す可しと雖も

其心長自寒 其の心 長く自ら寒し (その二十)

「死でさえも耐え忍ぶことができるのだから、辱めなどどうして我慢できぬことがある。私は顔が火照るような思いがあつても、その心はいつも冷めている」—祖國を滅ぼした北周に仕える恥辱に耐えながら生きている

辛さを吐露している。

* 懷愁正揺落 愁ひを懷きて正に揺落し

中心愴有違 中心 違ふ有るを愴む

獨憐生意盡 獨り憐れむ 生意の盡くるを

空驚槐樹衰 空しく槐樹の衰ふるに驚く(その二十一)

「愁いを懷きつつ、今や揺落ちんとして、心のうちの行いとの食い違いを愴み悲しむ。生氣の盡きてしまったのを獨り憐れみ、槐の老木の衰えにただ驚いているばかりだ。」―亡国の恨みを晴らせぬままに、氣力の衰えてしまった己を憐れんでいる。

「擬詠懷詩」が作られた時期はわからないが、内容から見て庾信の北周出仕後の作である。庾信は北周の末に家集を編んでおり、「擬詠懷詩」もその中に収められている。その家集には滕王宇文逌が序文を寄せているほどであるから、その詩の内容については北周の要人も知っていたことであろう。

西魏末の「別館囚於別館」「小園隱棲」などにおける抵抗のこともあり、また亡国の恨みを忘れかねている庾信を、北周側としても王褒のように扱えなかつたのではなからうか。

一方、王褒は代々宰相の家柄に生まれ育つた温厚な人物であり、北周に對する恨みは、あまり表面には出さなかつたようだ。従つて周朝の人たちも餘計な氣遣は必要でなく、そのため朝議にも参加させ、詔勅の作成をも任

せたのであろう。

北周の要人たちにとつて庾信は、心をゆるせないところのある人物であつたようだ。しかし北周にとつて庾信は、王褒とともに國の知識人を代表する存在であつた。

武帝の建德四年(五七五)に陳との國交が始まつて南人の歸還が許され、陳の側から庾信、王褒をはじめとする十数人の歸還を要請してきたが、北周の武帝は王克、殷不害らの歸還を認めたものの、庾信、王褒の歸還は許さなかつた。國政に関わつている王褒を手放さなかつた理由はわかるが、庾信をなぜ返さなかつたのか。問題のある人物ではあるが、その文章の才能はそれらを補つて餘りあるものと考へていたためであらう。

二 北周における庾信

庾信は祖國梁の滅亡に際し、身に迫る危険を避けんとするあまり十分な働きができなかつた。江陵陥落の後、梁の民は北地に連行され塗炭の苦しみを嘗めることになつたが、長安に在つて後にその事実を知つた庾信は、己の責任を痛感し「慚愧の念」に苛まれ続けた。それとともに、祖國を滅ぼした北周への恨みと、其の國に仕える恥辱は更に深まり、終生薄らぐことはなかつた。北周の要人たちが庾信を政治の中樞に用いようとしなかつたのは当然のことであらう。

要注意人物と見なされた庾信には、常に監視の目が向

けられていたようだ。そのことは彼の次のような作品を通して知ることができる。

* 「和張侍中述懐」(全60句の第53〜56句)

雖欣曲轅樹 曲轅の樹を欣ぶと雖も

猶懼雕陵鵠 猶ほ雕陵の鵠を懼る

生涯実有始 生涯 実(まこと)に始め有るも

天道終虚橐 天道 終(ついに)虚(むな)しくなり

「曲轅の樹を欣ぶと雖も、猶ほ雕陵の異鵠を懼れている。人の生涯にはそれでも始めが有るが、天道はどこまでも盡きることはない(天地は永遠であるけれども、人の命は限りがある。自分もこのままの状態で終わるのであるか)」

『雖欣曲轅樹』『莊子』人間世篇に「匠石 齊に之き、曲轅に至る。櫟社の樹を見るに、其の大なること數千牛を蔽ふ。

觀る者 市の如し。匠伯は顧りみず、遂に行きて輟めず」とある。「曲轅樹」は、何の役にも立たない無能な自分ゆえ無事に生きながらえていることを譬えている。「猶懼雕陵鵠」

『莊子』山木篇に「莊周は雕陵の樊に遊ぶ。一異鵠の南方より來たる者を睹る。翼の廣さは七尺、目の大きさは運寸。

周の類(ひな)に感(あ)れて栗林に集まる云云」とあり、その異鵠を捕えようとした莊子は、異鵠が蟬を狙っていること、更にその蟬を蠅螂が狙っているのに気づき、「物は全て互いに患(あ)わしあつており、利害は互いに招きあつている。恐ろしいことだ」と逃げ歸ろうとすると、栗林の番人が莊子を栗泥棒(りじり)と思つて追いかけてきた、という。

どういう事で疑惑を持たれるかわからない、北地に在つての身の危険について述べている。

これは内容から見て、「三年囚於別館」の時期か、その少し後の作であろう。庾信は梁における友人「張侍中」に、自分の置かれていた不安定な状態を述べている。異朝からの出仕の要請を何の役にも立たない「曲轅の樹」のふりをして躲(か)けているけれど、それが何時までも續けられるはずもないし、自分はここでは嘗ての敵國の人間であり、そのためどのような疑いをかけられるかわからない。いつも周囲を警戒して氣の休まるときは無い、と言う。

* 「小園賦」

鳥多閑暇 鳥は閑暇多く

花隨四時 花は四時に隨ふ

心則歷陽枯木 心は則ち歷陽の枯木

髮則睢陽亂絲 髮は則ち睢陽の亂絲

非夏日而可畏 夏日に非ざるも畏る可く

異秋天而可悲 秋天に異なるも悲しむ可し

「鳥はひねもすのんびりと、花は四季折々に咲いている。わが心はといえば歷陽における枯木、髮といえば睢陽の亂絲。夏の日でもないのに畏ろしく、秋の季節でもないのに悲しい思いをしている。「西魏に出仕しているながら「小園」に家族と共に隱棲(いんせき)の暮らしをしていることについて、北周側の反応を心配している。

* 「園庭」(全20句の結びの四句)

飛魚時觸釣 飛魚も時に釣に觸れ

翳雉屢懸庖 翳雉も屢ば庖に懸けらる
但使相知厚 但だ相ひ知ることの厚からしめば
當能來結交 當に能く來りて交りを結ぶべし
「飛魚も時に釣り鉤に觸れることがあるし、物蔭にいる雉も屢ば厨房に懸けられる。しかしながら厚い信頼に結ばれているならば、ここに来て交わりを結ぶことができるはずだ。」

時期はわからないが庾信はこのとき「飛魚も時に釣に觸れ、翳雉も屢ば庖に懸けらる」という、油断も隙もならない状態に置かれていたようである。

*「寒園即目」(全12句の結びの八句)

子月泉心動 子月 泉心 動き
陽文地氣舒 陽文 地氣 舒ぶ
雪花深數尺 雪花は 深さ數尺
冰牀厚尺餘 冰牀は 厚さ尺餘
蒼鷹斜望雉 蒼鷹は 斜に雉を望め
白鷺下看魚 白鷺は 下に魚を見る
更想東都外 更も想ふ 東都の外
羣公別二疎 羣公 二疎に別るるを

「仲冬にあたって泉の水は動き始め、陽氣が變化して地氣が伸び始めるが。雪の花はまだ數尺の深さ、氷の牀は尺餘の厚さ。蒼鷹は斜めに雉を望めており、白鷺は下の方に魚を見ている。東都門の外において、羣公が二疎を送別したことが今更のように思われる。」
冬の「寒園」の様子を見ての思いを詠じた作となつて

いるが、終わりの四句には、このとき作者の置かれていた状況が暗示されているようだ。「誰かにこちらの動きを監視されているような状態であり、この様子では早めに官界を退いた方がよさそうだ」と庾信は考えている。時期は不明であるが出仕後の作である。

ところで、庾信がこのように、祖国を滅ぼされた恨みを何時までも忘れずにおり、更にそのことを詩に詠じながら、それでも何とか無事に過ごせたのは何故であるうか。先ず考えられるのは、庾信が詩文の才によって、帝、諸王、諸侯らの保護を得ていたことである。既に挙げたように、『北周書』本傳には次のようにある。

世宗、高祖は並びに雅に文學を好めば、信は特に恩禮を蒙る。趙、滕の諸王に至りては、周旋款に至り、布衣の交りの若き有り。羣公の碑誌、多く相い請託さる。

中でも、趙王(宇文招。秦の第四子)、滕王(宇文迪。秦の第八子)とは特に親しく、とりわけ滕王は、庾信の詩文集に序を寄せているほどである。従つて諸王からの贈り物も多く、庾信は其の都度、禮状を認めている。

「謝趙王賚絲布等啓」「謝趙王賚絲布啓」「謝趙王賚米啓」

「謝趙王賚白羅袍袴啓」「謝趙王賚犀帶等啓」

「謝趙王賚乾魚啓」「謝趙王賚雉啓」「謝滕王賚巾啓」

「謝滕王賚馬啓」「謝滕王賚猪啓」「謝滕王集序啓」

「謝滕王示新詩啓」

しかし諸王や諸侯との親交は、詩文の面と私生活面に限られており、公的なこと、すなわち政治面には関わっていないかっただよう。庾信としては政治の面での関わりも期待していたのではないかと推測されるが、それは既に述べたような理由で認められなかったのである。

諸王との関わりが詩文の面と私生活面に限られていたことを示す例として、北周末の政変がある。すなわち次第に勢力を強めてきた外戚楊堅（隋の高祖）を誅殺せんとした北周の諸王が、逆に楊堅のために次々と殺害されていった。

大象二年（五八〇）六月、雍州の牧畢王賢及び趙、陳等の五王（趙王招、陳王純、越王盛、代王達、滕王道）は、天下の望の、高祖に歸するを以て、因りて亂を作さんと謀る。高祖は賢を執えて之を斬り、趙王らの罪を寢む。因りて五王に詔して劍履上殿、入朝不趨とし、用て其の心を安んず。

七月、五王の陰謀、滋よ甚し。高祖は酒肴を齎して以て趙王の第に造り、爲す所を觀んと欲す。趙王は甲（士）を伏して以て高祖を宴す。高祖幾ど危きも、元冑に頼りて以て濟る。是に於て趙王招、越王盛を誅す。

十月、陳王純を誅す。
十一月、代王達、滕王道を誅す。

大象二年六月、雍州牧畢王賢及趙陳等五王以天下之望歸於高祖、因謀作亂。高祖執賢斬之、寢趙王等之

罪、因詔五王劍履上殿、入朝不趨、用安其心。七月、五王陰謀滋甚。高祖齎酒肴以造趙王第、欲觀所爲。

趙王伏甲以宴高祖。高祖幾危、頼元冑以濟。於是誅趙王招、越王盛。十月、誅陳王純。十一月、誅代王達、滕王道。（『隋書』高祖紀上）

殺害された諸王と「布衣の交り」を結んでいた庾信にとつては、それは実に危険な状態であったと思われるが、禍は庾信に及ぶことはなかった。それは諸王たちとの関わりは詩文のうえだけのことであつて、政治上の関わりを持たなかつた故ではなからうか。

庾信が北周への恨みと、その國に仕える恥辱を持ち続けながらも生涯を全うし得たのは、庾信を政權の中樞に關わらせることがなかつた國の扱い方にもよつたのである。

北周における庾信は、要するにどのような存在であつたのか。「哀江南賦」の結びにある庾信本人の言葉にそれが示されている。庾信は北周における自分の存在を「灞陵の下、故の將軍」に喩えている。

日は紀に窮まり、歳は將に復た始まらんとす。
危慮に逼切られ、暮齒に端憂す。

長樂の神臯を踐み、宣平の貴里を望む。

渭水は天門を貫き、驪山は地市を回らす。

幕府大將軍の客を愛し、丞相平津侯の士を待する。
鐘鼎を金・張に見、絃歌を許・史に聞く。

豈に知らんや灞陵の夜獵、猶ほ是れ故時の將軍。

咸陽の布衣なるは、獨り思歸の王子のみに非ず。

日窮于紀、歲將復始。

逼切危慮、端憂暮齒。

踐長樂之神阜、望宣平之貴里。

渭水貫於天門、驪山回於地市。

幕府大將軍之愛客、丞相平津侯之待士。

見鐘鼎於金張、聞絃歌於許史。

豈知灞陵夜獵、猶是故時將軍。

咸陽布衣、非獨思歸王子。

月日は過ぎて、新しい歳が復た始まろうとしてゐる。これからのことが心配でたまらず、老いの身に憂いが迫ってくる。「長樂宮の神阜門を抜けると宣平門近くに顯貴の人たちの高門華屋が望まれる。渭水は天門を通つて流れ、驪山には地中の都市が回らされている。」幕府の「大將軍」は賓客を賞愛され、丞相の「平津侯」は有能の士を奉待される。私は「金・張」氏の邸での宴會に招待され、「許・史」氏の家で絃歌を聞く。」しかしながら我が身は「灞陵の夜獵」における「故時の將軍」のような存在。「咸陽の布衣」の状態は、歸國を願ひ續けていた楚の王子だけのことではないのだ。

「豈知灞陵夜獵、猶是故時將軍」は、漢の將軍李廣の故事を踏まえている。李廣が官を退いて退居していた時、狩獵で遅くなつて夜に灞陵の門を通ろうとすると、亭尉に通行を拒否された。従者が「是れ故の李將軍」と言うと、尉は「今の將軍すら尚ほ夜行する能はず。何ぞ乃ち

故なるをや」と言つて通さなかつたため、李廣は亭の側で夜を過ごすことになつた。庾信は梁の右衛將軍であつたので、李廣に喩えた。自分は長安では「故時の將軍」のような無力な存在なのだと言ふ。

「咸陽布衣、非獨思歸王子」は、楚の頃襄王の太子が人質として秦に留められていた時、「思歸歌」すなわち「洞庭兮木秋、涇陽兮草衰。去千乘之家國、作咸陽之布衣」（洞庭 木は秋となり、涇陽 草衰ふならん。千乘の家國を去りて、咸陽の布衣と作る）を作つたという話を踏まえる。江南に歸りたがっているのは「長安の布衣」として留められていた王子だけではないのだと言ふ。

すなわち庾信は、詩文の面では帝や諸王に高く評価されていたが、その他の面では「故時の將軍」のように無力であり、いつも「思歸の歌」を歌っている「咸陽の布衣」のような存在に過ぎないのだと言ふ。

「哀江南賦」が作られた時期はわからないが、賦の中で「老幼を提挈し、關河に年を累ぬ」とあるので、北地に來てから、ある程度「年を累」ねてからの作のようだ。

同様の内容は「奉和趙王西京路春旦」（趙王の「西京路の春旦」に和し奉る）の結びにも見られる。

楊柳成歌曲 楊柳 歌曲を成し

蒲桃學繡文 蒲桃 繡文を學ぶ

鳥鳴還獨解 鳥の鳴くや 還ほ獨りは解し

花開先自薰 花の開くや 先づ自ら薰る

誰知灞陵下 誰か知らん灞陵の下
猶有故將軍 猶ほ故の將軍の有るを

(全18句の第13～18句)

「楊柳は歌曲として歌われ、蒲桃は刺繡の模様にも真似られる。鳥が鳴けばそれを解する人が、それでも獨りはいらぬものなのに。花は咲くときに、先ず薫りが流れるものなのに。誰が知ろうか灞陵の下に、猶ほ故の將軍が留められていることを。」誰の注意をひくこともなく、その存在を示すこともできない自分を「灞陵の下の、故の將軍」に喩えている。

また、同じような思いは「慨然成詠」（慨然として詠を成す）詩に、次のように詠われている。

新春光景麗

新春 光景 麗しくも

遊子離別情

遊子に 離別の情あり

交讓未全死

交讓 未だ全くは死せず

梧桐唯半生

梧桐 唯だ半ば生くるのみ

值熱花無氣

熱に値ひて 花に氣 無きも

逢風水不平

風に逢へば 水は平らかならず

寶鷄雖有祀

寶鷄 祀らるる有りとも雖も

何時能更鳴

何れの時か 能く更に鳴かん

「新春となつて日の光は麗わしくても、旅人である私は離別の情だけが付きまとう。交讓の木のように未だ全くは死んでおらず、梧桐のように唯だ半ば生きているだけだ。」熱にあたつて花に香りは無いけれど、風に逢えば水は波立ち平らかではない。寶鷄のように祀られてはい

るが、鳴くことができるのは何時のことか。」——高い地位に祭りあげられているだけで、行動の場は與えられておらず、ただ無為に日を送っているだけの暮しを彼は歎いている。

北周にとつて庾信は、王褒とともに國の文化程度を示す知識人の代表であつた。陳朝になつて、梁を滅ぼした時に北に連行した高官を還してくれるように要求した時も、庾信と王褒だけは還そうとしなかつたように、この二人は北周の知識人を代表する存在であつた

ただ、王褒は亡國の恨みは胸におさめて政權に協力したが、庾信は、慚愧の念と、祖國を滅ぼされた恨み、その恨みある國に仕える恥辱を忘れることはできなかった。「三年囚於別館」の頃からの要注意人物は、「鳴くことを認められない寶鷄」「灞陵の下の、故の將軍」として後半生を送っている。

三 結び

王褒は、武帝の建徳五年（五七六）頃、宜州刺史在任中に没した。六四歳であつた。庾信は「王司徒褒を傷む」詩を作り、その死を悼んでいる。全五十八句の長編で、初めに南朝の名家、琅琊王氏の榮光を讃え、ついでその後裔である王褒の才能と名声を述べて、その死を傷んでいる。今、その結びの部分を挙げて、庾信の王褒への思いをうかがってみよう。

昔爲人所羨 昔は人の羨む所と爲り

今爲人所憐 今は人の憐れむ所と爲る

世途旦復旦 世途 旦にして復た旦

人情玄又玄 人情 玄にして又た玄

故人傷此別 故人 此の別れを傷み

留恨滿秦川 恨みを留めて 秦川に滿つ

定名於此定 名を定むるは 此に於て定まり

全德以斯全 德を全うするは 斯を以て全し

惟有山陽笛 惟だ山陽の笛有り

悽余思舊篇 余が思舊の篇を悽ましむ

昔は人に羨まれ、今は人に憐れまれる。世の常として月日が過ぎてゆけば、人の情も次第に薄らいでゆくもの。」しかし私は此の別れを傷み、恨みは留まつて秦川の地に満ちる。名は死によつて定まり、徳は死によつて終結するもの。」君の舊居から聞こえてくる笛の音が、私の詩を悽ましいものにする。

「名は死によつて定まり、徳は死によつて終結するもの」と言われている。君は北地で安定した暮しを送つたように見えるが、本当に君はそれで好かつたと思つていたのだろうか。―君は言葉や態度にこそ表さなかつたが、思ひは私と同じであつたに違いないと、やがて同様に異郷で終わることになるであろう自分の身の上を重ね合わせながら、庾信は友の死を悼んでいる。

注

(1) 梁末の「侯景の亂」から建康陥落、更に江陵陥落までの数年間における庾信の行動には、氣になることが幾つかある。すなわち、(一) 侯景の建康侵攻に際して、建康令として首都防衛の要である朱雀桁の守備を任されながら、進攻してくる賊軍と一戦も交えることなく退却したこと。(二) 賊軍に制圧された建康を独り脱出して姿をくらましたこと。臺城内には武帝、簡文帝、それに父親の庾肩吾も居たのに、彼は單身脱出している。江陵に抛る湘東王蕭繹(元帝)に救援を求めようとしてのことであつたとしても、建康を出てから江陵に辿り着くまで二年以上もかかつており、これでは救援要請とはならない。(三) 江陵が西魏軍に包囲される三カ月前、庾信は元帝の使者として、妥結の見込みの全く無い交渉のために西魏に行つている。このとき庾信は元帝側近の讒言によつて生命の危険にさらされており、それを避けるための出行であつたようだ。庾信がこれらの行動をとつた主要な理由として、彼が何よりも自分の身の安全を考えて行動する人であつた、ということが考えられよう。以上の三つの行動に共通する要素からそのように思われる。そうして身の安全だけを保とうとして行動したあとの思ひは、後に梁の民の悲惨な結末を知つて身を責め続ける「慚愧の念」であつたに違いない。

(2) 「小園賦」に「薄晩の閑閑に、老幼相攜ふ。蓬頭は王霸の子、椎髻は梁鴻の妻」、「哀江南賦」に「老幼を提挈し、関河に年を累ぬ」とあるので、江陵陥落後、老母と妻、幼児が連れてこられたのであろう。

(3) 王褒「贈周處士詩」(『類聚』卷三六、『文苑英華』卷二三)

○「與周弘讓書」〔北周書〕王褒傳

初め褒は梁の處士である汝南の周弘讓と仲が善かった。弘讓の兄の弘正が陳から來聘すると、高祖は褒らに親知の人に首問を通ずることを許した。褒は弘讓に詩を贈り、并せて書を送っている。

〔贈周處士詩〕

我行無歲月

我が行に歲月無く

征馬屢盤桓

征馬屢ば盤桓す

嶠曲三危岨

嶠は曲り三危は岨しく

關重九折難

關は九折の難を重ぬ

猶持漢使節

猶ほ漢使の節を持し

尚服楚臣冠

尚ほ楚臣の冠を服す

巢禽疑上幕

巢禽は上幕を疑ひ

驚羽畏虛彈

驚羽は虛彈をも畏る

飛蓬去不已

飛蓬去りて已まず〔蓬〕一作〔鴻〕

客思漸無端

客思漸く端無し〔思〕一作〔念〕

壯志與時歇

壯志は時と與に歇き

生年隨事闌

生年は事に隨ひて闌なり

百齡悲促命

百齡 促命を悲しむ

數刻念餘歡

數刻 餘歡を念ふ

雲生隴坻黑

雲は隴坻の黒きに生じ

桑疎薊北寒

桑は薊北の寒きに疎なり

鳥道無蹊徑

鳥道に蹊徑無く

清漢有波瀾

清漢に波瀾有り〔漢〕類聚作〔溪〕

思君化羽翮

君の羽翮に化するを思ふ

要我鑄金丹 我に金丹を鑄せんことを要む

私の旅路は何時終ることやら、征馬はしばしば盤桓る。

嶠山の路は曲がりくねり、三危の山は岨しく、關所では九折の難を重ねた。」それでも猶ほ漢使の節を持ち、尚ほ楚臣の冠を服していた。巢作りをする禽は幕の上に作っているのではと疑ひ、びくついている羽は、虚彈さえも畏れていた。」飛蓬のように去つて已まず。客の思いは深まるばかり。

わが壯志は時と與に歇き、人生は事に隨つて過ぎて行く。」生涯の縮んでゆくのを悲しみつつ、數刻の餘された歡みを念ふ。雲は隴坻山の黒々とした所に生じ、桑は薊北の寒きあたりに疎に生えている。」鳥の通う道には蹊徑は無く、清らかな漢水には波瀾が有る。あなたが羽翮の仙に化しているのではないかと思ふ、どうか私に金丹を鍊つてはくいださるぬか。

〔與周弘讓書〕

・嗣宗窮途、楊朱歧路。征蓬長逝、流水不歸。舒慘殊方、炎

涼異節。木皮春厚、桂樹冬榮。想攝衛惟宜、動靜多豫。

・賢兄入關、敬承款曲、猶依杜陵之水、尚保池陽之田、籛迹

幽蹊、銷聲穹谷。何期愉樂、幸甚幸甚。

・弟昔因多疾、亟覽九仙之方。晚涉世途、常懷五嶽之舉。同

夫關令、物色異人、譬彼客卿、服膺高士。上經說道、屢

聽玄牝之談、中藥養神、每稟丹沙之說。頃年事適盡、容

髮衰謝。芸其黃矣、零落無時。

・還念生涯、繁憂總集。視陰愒日、猶趙孟之徂年、負杖行吟、

同劉琨之積慘。河陽北臨、空思鞏縣、霸陵南望、還見長

安。所冀書生之魂、來依舊壤、射聲之鬼、無恨他鄉。
・白雲在天、長離別矣。會見之期、邈無日矣。援筆攬紙、龍
鍾橫集。

阮嗣宗には窮途があり、楊朱には歧路があつた。轉蓬はどこまでも長く逝き、流れる水は歸つてはこない。江南での舒びやかな暮らしと北地での惨めな暮らしを過こし、炎さと涼さと異なる季節を送つた。こちらでは木の皮は春になつても厚く、桂の樹は冬に花を咲かせる。養生に努めて、行いに豫びの多い日々を送りたいと願つている。「賢兄がこちらに來られ、敬んで打ち解けたお話を承りましたが、あなたは今も猶杜陵の水辺に依り、尚も池陽の田を保つて、足迹を幽蹊に躡し、聲を穹谷に銷けこませておられるとのこと。何と愉樂そうなことか。幸甚。幸甚。」弟は以前から疾がちなため、亟ば多くの仙人の藥方を覽てきた。晩年になり世俗の途に関わるようになったが、五嶽に行きたいという思いを常に懐いている。あの關令尹喜と同じように、異人を物色し、譬へば客卿でありながら、高土に服膺しているように。上經の説教の際には、屢ば玄牝の談を聴き、中藥によつて精神を養い、毎に丹沙の説を棄けてきた。この頃は歳を重ねて、容姿頭髮は衰えてしまった。ぼさぼさに生えて黄ばんでしまい、零落するのも間もなくのことだろう。」振り返つて吾が生涯を念ふに、繁き憂いが總て集まつてくる。

陰を視 日を憫ることは、猶お趙孟が死に近付いて行くがごとく、杖を負んで行く吟ずることは、劉琨の積もれる

慘れと同じだ。河陽から北に臨めば、空しく鞏縣が思われ、霸陵から南を望めば、なお長安が見えるばかり。冀わくは書生としての魂の、來りて舊の壤に依り、射聲の鬼の、他郷において恨みを抱くことの無いようでありたい。「白雲が天に在るように、長く離別してしまつた。會える日は、邈として何時のことか。筆を援つて紙を攬れば、涙が溢れてくる。」
(4) 「小園賦」について

庾信は西魏に仕えても、王褒のように從順ではなかつた。與えられた官「使持節撫軍將軍・右金紫光祿大夫・大都督」、或いは「車騎大將軍・儀同三司」のまま、家族と共に「小園」に「隱棲」していたようだ。「小園賦」が何時ごろ作られたものなのか未詳であるが、内容から見て、それは西魏の末、庾信が「別館」を出て後、北周になつて臨清縣子に封ぜられ司水大夫に除せられるまでの半年足らずの間のことではなからうか。

そのように考えられる理由としては、まず「小園賦」の(四)の部分に、

淮海變す可きに非ず、金丹能く轉ずるに非ず。
骨を龍門に暴さずして、終に頭を馬坂に低る。

「淮海に入つても雉のように何かに變わることができるといふわけでもないし、金丹のように次々と質が轉化するわけでもない。死んで骨を龍門に暴すこともできず、終に恥辱を受けて頭を馬坂に低れることになつた」とある。すなわち「私は他の人たちのように簡単に転向して異朝に仕えることもできず、(はかない抵抗のその果ては)祖國梁への忠節

を全うできないままに、嘗ての千里馬は落ちぶれて鹽運びの馬とされ、醜態を曝している。」というのであるから、これは既に西魏への出仕を認めてその官に就いていることを意味しているのであろう。

従つて「小園賦」が作られたのは「三年囚於別館」の時ではなく、そのあとの西魏出仕後のことのようにだ。賦に述べられている隠棲の場所、生活の様子が、「囚於別館」でのそれとは思えない状態であるのはそのためであらう。更に言えば西魏への出仕を認めて、職事の無い散官を與えられていた時期のことと考えられる。実務があつたら隠棲など出来るはずがない。庾信が職務のある官職に就くのは、西魏が北周に國を禪つてからのことであつた。

*次に(二)の部分には、

試みに茂林に偃息す、乃ち久しく簪を抽くを羨む。鳥は何の事ありてか酒を逐はん、魚は何の情ありてか琴を聴かん。

「試みに茂林に休息したが、それは乃ち官を棄てた人のことを久しく羨んでいたからだ。鳥は本来どうして酒を欲しがつたりしようか、魚はもともと琴に耳を傾けたりはしないものだ——すなわち庾信は、與えられた官に相応しい屋敷と、それと「小園」を給付されたようだが、異朝の臣となることに猶も内心忸怩たる思いがあるために、「試みに屋敷から出て小園に住み」隠棲への道を探っていたのであろう。鳥は酒を欲しがつて逐ってきたりはしないし、魚は琴の音を聴きたいとは思っていない。それなのに私は異朝に仕えてしまった。

—自分の本来の性質に従つて隠棲したい、嘗ての敵国に仕えることはしたくない。それなのに仕出を認めたと今の自分は、其の本性を失つた状態だ。庾信はこのように考へて「試みに屋敷から出て小園に住む」ことにしたのではなかるうか。

*北の異朝への仕出が、自分の素志、本性に違つてゐることについて、賦の(三)にも次のようにも述べてゐる。
加ふるに寒暑令を異にするを以て、徳性に乖違す。崔駰は樂しまざるを以て年を損ね、呉質は長く愁ふるを以て病を養ふ。

「そのうえ北地の寒暑は南の曆とは異なつており、私の徳性にはなじまない。そのため崔駰のように樂しまざるままに年を損ね、呉質のように長く愁えて病を養ふことになつた」と。

*すなわち庾信の「小園」隠棲は、北の朝廷に対する彼なりの反抗であつた。賦の(一)には、

心は則ち歷陽の枯木、髪は則ち睢陽の亂絲。

夏日に非ざるも畏る可く、秋天に異なるも悲しむ可し。のように言つてゐるのは、散官とはいへ官に在りながら勝手に「小園」に隠棲してゐるのであるから、どのような咎めがあるかわからないという畏れが有つたためではなかるうか。

「秋天に異なるも悲しむ可し」の方は、北地に在つての望郷の思ひであらう。

「小園賦」の内容から見て、やはり此の作は西魏出仕後間もなくの作であり、異朝の臣になりきれぬままに「小園」に隠棲を試みた様子を記したものであつた。(庾信の小園賦

について」安田女子大学大学院紀要12)

(序) 若夫一枝之上、巢父得安巢之所、一壺之中、壺公有容身之地。況乎管寧藜牀、雖穿而可坐、康鍛電、既煖而堪眠。豈必連閣洞房、南陽樊重之第。綠塢青瑣、西漢王根之宅。『余有數畝敝廬、寂寞人外。聊以擬伏臘、聊以避風霜。雖復晏嬰近市、不求朝夕之利。潘岳面城、且適間居之樂。況乃黃鶴戒露、非有意於輪軒。爰居避風、本無情於鐘鼓。陸機則兄弟同居、韓康則舅甥不別。蝸角蚊睫、又足相容者也。』

(一) 爾乃窟室徘徊、聊同盤坏。桐間露落、柳下風來。琴號珠柱、書名玉杯。有棠梨而無館、足酸棗而非臺。『猶得欲側八九丈、縱橫數十步。榆柳三兩行、梨桃百餘樹。撥蒙密兮見窗、行欹斜兮得路。蟬有翳兮不驚、雉無羅兮何懼。』草樹混淆、枝格相交。山爲簣覆、地有堂坳。藏狸並窟、乳鵲重巢。連珠細菌、長柄寒匏。』可以療飢、可以棲遲。敝區兮狹室、穿漏兮茅茨。簷直倚而妨帽、戶平行而礙眉。坐帳無鶴、支牀有龜。』鳥多閑暇、花隨四時。心則歷陽枯木、髮則睢陽亂絲。非夏日而可畏、異秋天而可悲。

(二) 一寸二寸之魚、三竿兩竿之竹。雲氣蔭於叢著、金精養於秋菊。棗酸梨酢、桃穠李蕪。落葉半牀、狂花滿屋。名爲野人之家、是謂愚公之谷。』試偃息於茂林、乃久羨於抽簪。雖有門而長閉、實無水而恒沈。三春負鋤相識、五月披裘見尋。問葛洪之藥性、訪京房之卜林。草無忘憂之意、花無長樂之心。鳥何事而逐酒、魚何情而聽琴。

(三) 加以寒暑異令、乖違德性。崔駰以不樂損年、吳質以長愁養病。鎮宅神以蘊石、厭山精而照鏡。婁動莊舄之唼、幾行

魏顆之命。』薄晚閑閨、老幼相攜。蓬頭王霸之子、椎髻梁鴻之妻。燠麥兩甕、寒菜一畦。風騷騷而樹急、天慘慘而雲低。聚空倉而雀噪、驚懶婦而蟬嘶。

(四) 昔草濫於吹噓、藉文言之慶餘。門有通德、家承賜書。或陪玄武之觀、時參鳳凰之墟。觀受驚於宣室、賦垂楊於直廬。遂乃山崩川竭、冰碎瓦裂。大盜潛移、長離永滅。摧直轡於三危、碎平途於九折。荊軻有寒水之悲、蘇武有秋風之別。關山則風月悽愴、隴水則肝腸斷絕。龜言此地之寒、鶴訝今年之雪。』百齡兮倏忽、光華兮已晚。不雪雁門之騎、先念鴻陸之遠。非淮海兮可變、非金丹兮能轉。不暴骨兮龍門、終低頭於馬坂。諒天造兮昧昧、嗟生民兮渾渾。

(5) 西魏末、「三年囚於別館」時期における庾信の思い、すなわち梁末の自分の行動に對する慙愧の念は、その「竹杖賦」「枯樹賦」などに記されている。

〔庾信略年譜〕

梁(武帝)

太清二年 五四八(三六歲)

・八月、侯景、壽陽に兵を挙げる。

・十月、臺城を包囲。

*建康令庾信、朱雀門の防衛に当たるも、戦わずして退却。建康を脱出。約二年後、江陵の湘東王繹の許に身を寄せる。戦乱の中で、幼い二男一女を失う。

太清三年 五四九(三七歲)

・三月、臺城 陥落。武帝 没す。

(簡文帝)

大寶元年 五五〇 (三八歳)

・五月、高陽は東魏孝静帝から位を譲られて帝位に即き、齊と号す。

*庾信、江陵の湘東王繹の許に身を寄せる。

大寶二年 五五一 (三九歳)

・十一月、侯景帝位に即く。

(元帝)

承聖元年 五五二 (四〇歳)

・三月、王僧辨は侯景を討伐。

・十一月、湘東王繹 江陵で帝位に即く。

承聖三年 五五四 (四二歳)

*七月、庾信は国使として西魏に赴く。(時に庾信は元帝への

讒言により、危険な状態にあった)

・十月、西魏軍 江陵に侵入。十一月、江陵 陥落。

・十二月、元帝 殺される。王褒は王克、劉、宗懐、殷不害ら

と長安に拉致され、西魏に仕える。

*庾信は西魏(長安)に拘留され、その「三年」、別館に「囚

えられていた。

西魏(恭帝)

大定三年 五五六 (四四歳)

・十月、宇文泰 没す。

*この前後、庾信は西魏に出仕し、使持節 撫軍將軍、金紫光

禄大夫、大都督に任ぜられ、ついで車騎大將軍、儀同三司に

遷る。(この頃「小園」に隠棲か)

・十二月、西魏の恭帝、位を宇文覚に譲る。

北周(孝閔帝)

永定元年 五五七 (四五歳)

・一月、宇文覚 帝位に即く。(孝閔帝)

*庾信は臨清縣子に封ぜられ、司水下大夫となる。(この後、

弘農郡守、司憲中大夫、麟趾殿學士(五六〇)、洛州刺史、司宗

中大夫を歴任、爵を義城縣侯に進められている)

・九月、宇文護は孝閔帝を殺し、宇文毓(明帝)を立てる。

・十月、陳霸先は帝位に即き、国号を陳と号す。

(明帝)

武成元年 五五九 (四七歳)

武成二年 五六〇 (四八歳)

*庾信は、王褒、庾季才らとともに麟趾學士となり、書を校す。

・四月、明帝(宇文毓)は宇文護に殺され、宇文邕(武帝)即

位す。

(武帝)

保定元年 五六一 (四九歳)

*庾信、司水下大夫に除せらる。

建德元年 五七二 (六〇歳)

・三月、武帝は宇文護を誅し、親政を行う。

建德五年 五七六 (六四歳)

*庾信は此のころ、洛州刺史であった。

・王褒 没す。64歳。

建德六年 五七七 (六五歳)

・一月、武帝は親征して北齊を滅し、華北を統一。

(宣帝)

宣政一年 五七八(六六歳)

・六月、武帝没す。36歳。太子贇ひん即位(宣帝)

大成一年(大象一年) 五七九(六七歳)

・二月、宣帝は太子衍えんに位を譲り(静帝)、天元皇帝と称す。

*庾信は病氣のため、司宗中大夫の職を辞す。

家集を編み、滕王道とうに序を寄せられる。

(静帝)

大象二年 五八〇(六八歳)

・五月、天元皇帝没す(22歳)。外戚楊堅実権を握る。

七月、趙王招しやう楊堅に誅される。

・十二月、滕王道とう楊堅に誅される。

隋(文帝)

開皇一年 五八一(六九歳)

・二月、静帝は楊堅に位を譲り、隋興る。

*庾信、病没。本官の司宗中大夫を追贈され、荊雍二州刺史を

加えられる。